

# 再出発した「産業観光バス」

「産業観光」は、近年、新しい観光のあり方として注目を集めている観光形態だが、実は中部圏では、1964年（昭和39年）に第3セクター「名古屋遊覧バス」が名古屋市内およびその周辺の産業施設を回る定期観光バスツアーをスタートさせて以来、40年以上の歴史を重ねてきていた。しかし、2006年3月の名古屋遊覧バスの解散により、そのバスツアーも廃止。いったんは再開の見込みが全く立たない状況であったが、半年後の2006年10月、観光客の誘致を目指す市の外郭団体「財名古屋観光コンベンションビューロー」の働きかけに賛同した2つの旅行会社によって、再びスタートが切られることとなった。全国でも、期間限定やモニターツアーという形での産業観光バスは各種行われているが、年間を通し定期的に催行される形態は他にない。また、今回の再開に際し全国的に初の試みとして注目されるのが、「ビジネスとして成立させる」という点。その内容と展望、課題について、今回ツアーに参加した体験談も交え、紹介したい。

## 産官連携で観光に新たなビジネスモデルを

### 1. 再出発までの経緯

#### 第3セクター「名古屋遊覧バス」の解散

名古屋市・名古屋鉄道・UFJ銀行出資の第3セクター「名古屋遊覧バス」は、1962年（昭和37年）に設立され、「名古屋のはとバス」的な存在として名古屋市内の定期観光バス事業を開始。1964年（昭和39年）からは産業観光バスツアーもスタートさせ、以来40年以上に渡り、定期観光バス路線と産業観光バスツアーの2事業で名古屋市内および周辺地域の定期観光バスとしての機能を担っていた。2006年3月、その名古屋遊覧バスが解散し、市内定期観光については名古屋市が運行する「名古屋観光ルートバス」<sup>(※1)</sup>に引き継がれたが、産業観光バスツアーは後釜となるものがなく、いったんは廃止に追い込まれた。

#### 民間2社による再開へ

（財）名古屋観光コンベンションビューロー<sup>(※2)</sup>（以下、コンベンションビューロー）では、産業観光の推進地域としてこれまでも積極的に関与してきたことから、「産業観光バスは産業観光の促進に不可欠」として何とか新たな運行形態によ

#### 【産業観光とは】

産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでにどのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する“知的好奇心にあふれた”観光形態。具体的には、製造業の工場見学や伝統産業の体験プログラム、企業博物館、公設博物館、環境・エネルギー関連の先端技術研究拠点、また産業遺産・遺構や農林水産物の加工業の工場などを対象とした観光。こうした施設を訪ねる機会は、社会見学や企業視察などによるものがあるが、特定の団体や目的に限らず、一般観光客でも楽しめるように門戸を広く開放していこうとするところが「産業観光」の特徴。

（※1）名古屋観光ルートバス：土曜・日曜・休日運行。名古屋駅と徳川園の間を1日7往復、名古屋城、産業技術記念館、ノリタケの森などを巡る。現在は市バスを使用しているが、2007年度からは市内観光の顔となる新しい専用バスで運行される予定。このバスが走ることで観光都市名古屋のイメージの醸成につながることが期待されている。

（※2）（財）名古屋観光コンベンションビューロー：名古屋市及びその周辺地域の産業、技術及び文化、歴史などの資源を活用し、コンベンション及び観光の振興を図ることにより、地域の産業経済の活性化及び文化の向上並びに国際相互理解の増進に資することを目的として設立。事業はコンベンション・観光・イベント・名古屋国際会議場の管理運営の4つ。いずれの事業についても国内だけでなく国際的な規模のものについても積極的に推進。

る復活を模索。名古屋遊覧バス解散の前から、民間の旅行者やバス業者などと再開に向け話し合いを続けてきた。しかし当初は、産業観光バスの定期運行は採算的に合わないということで、どの会社も否定的。再開の見込みは全く立たなかった。その中でもコンベンションビューローや名古屋商工会議所などは必要性を訴え続け、4月に業者向けの説明会を開催。9社集まった中で、「名鉄観光サービス」と「名阪近鉄旅行」の2社が名乗りを上げ、2006年10月の再開が決まった。

## 2. 再開後の産業観光バスツアーの特徴

### 毎週2回、年間を通して定期催行

再開された産業観光バスツアーの実施概要は資料1・資料2の通り。この産業観光バスツアーは全国的にも例のない独自の特徴を大きく3つ持っている。

1つは、「産業観光バス」という一つのコンセプトのもとに実施するバスツアーであることを

【資料1 産業観光バスツアーの実施概要】

| 実施者（申込先） | 名鉄観光サービス（TEL: 052-561-8051） | 名阪近鉄旅行（TEL: 052-563-7500） |
|----------|-----------------------------|---------------------------|
| 企画協力     | （財）名古屋観光コンベンションビューロー        |                           |
| ツアー形態    | 日帰り・昼食付、ガイド添乗               |                           |
| 実施日      | 毎週火曜日                       | 毎週水曜日                     |
| 参加条件     | 満15歳以上                      |                           |
| 参加料金     | 6000円（全コース共通）               | 6500円（全コース共通）             |
| 集合・解散場所  | 名古屋テレビ塔北側観光バス駐車場            | 栄オアシス21バスターミナル            |
| コース      | 2カ月単位で設定（コース例は資料2参照）        |                           |

【資料2 産業観光バスツアーのコース】

#### 10月～11月のコース

| 実施日       | 見 学 先                                       |
|-----------|---------------------------------------------|
| 10月 3日（火） | 文化のみち二葉館、名古屋港イタリア村、有松・鳴海絞り会館、徳川園、アサヒビール名古屋  |
| 10月 4日（水） | 瀬戸蔵ミュージアム、モリコロパーク、名古屋港イタリア村、堀川下り、ノリタケの森     |
| 10月10日（火） | 長命寺、日牟礼八幡宮、近江八幡市内散策、たねや（和菓子）、水郷めぐり          |
| 10月11日（水） | 資生堂アートハウス、浅羽コスモス、磐田市香の博物館、浜松市楽器博物館ほか        |
| 10月17日（火） | 古川まつり会館、古川市内（蒲酒造）、古川市内散策                    |
| 10月18日（水） | たけふ菊人形展、安田かまぼこ工場、コスモス広苑、羽二重餅の古里             |
| 10月24日（火） | マルスウィスキー、光前寺、奈良井宿                           |
| 10月25日（水） | 諏訪大社、蓼科バラクライングリッシュガーデン、丸井伊藤商店・味噌蔵見学         |
| 10月31日（火） | 伊賀湖旅客ターミナル、田原市立博物館、魚や長栄、マルカ農園、恋路が浜          |
| 11月 1日（水） | 郡上・食品サンプル模型工房、飛騨高山散策、飛騨物産館                  |
| 11月 7日（火） | 越前そばの里、大本山永平寺、羽二重餅の古里                       |
| 11月 8日（水） | 奈良井宿散策、かんてんばば工場見学、農園りんご狩り、お菓子の飯田城           |
| 11月14日（火） | 豊田佐吉記念館、浜名湖ガーデンパーク、春華堂のうなぎバイ、千代と一豊掛川館、楽器博物館 |
| 11月15日（水） | 信楽陶芸村、石山寺、井筒八つ橋本舗、近江神宮、鮎家の郷                 |
| 11月21日（火） | キュービー拳母工場、八丁味噌の里、あいや西条園、かわら美術館、おかきや辰心       |
| 11月22日（水） | 東海道広重美術館、ステップインたまるや、焼津さかなセンター、三保の松原         |
| 11月28日（火） | 味の素東海事業所、ばんこの里会館、関の町並み散策、AGF鈴鹿工場            |

#### 12月～1月のコース

| 実施日       | 見 学 先                                       |
|-----------|---------------------------------------------|
| 12月 5日（火） | 越前そばの里、九頭竜ダム、大野市内散策、平成大野家                   |
| 12月 6日（水） | 瀬戸の土が産んだ歴史コース散策、永保寺、市之倉さかずき美術館、幸兵衛窯         |
| 12月12日（火） | かんてん村パーク、岩村散策（岩村醸造）、馬籠宿、すや西本店               |
| 12月13日（水） | 松花堂庭園、宇治上林三入本店（お茶づくり体験）、信楽焼                 |
| 12月19日（火） | お茶の郷、島田宿、大井川鐵道家山駅、新金谷駅、牧ノ原台地                |
| 12月20日（水） | 伊勢河崎商人館、伊勢神宮内宮、蘇民将来しめ縄作り体験、二見夫婦岩            |
| 12月26日（火） | 黒はんべい（山徳工場）、駿府匠宿、STEPINたまるや、焼津さかなセンター       |
| 12月27日（水） | 蓬萊橋、駿府匠宿、わさび工場、焼津名産はんべい工場                   |
| 1月 9日（火）  | 岡田地区散策、赤レンガ建物、酢の里、国盛酒の文化館、おかきや辰心            |
| 1月10日（水）  | 二見興玉神社、伊勢神宮外宮、伊勢神宮内宮                        |
| 1月15日（月）  | 二見ヶ浦（興玉神社）、伊勢内宮、おかげ横丁、伊勢河崎館                 |
| 1月17日（水）  | 八日市大風会館、道の駅あいとう（手作り体験）、蔵元藤居本家、多賀大社参拝        |
| 1月23日（火）  | 白鳥庭園、徳川園、山田天満宮、金神社、金虎酒造、ブラザーコミュニケーションスペースほか |
| 1月25日（木）  | 熱田神宮、上野天満宮、徳川美術館、アサヒビール名古屋工場                |
| 1月30日（火）  | 蟹江市内散策、甘強酒造、七宝焼アートヴィレッジ、お千保稲荷、麒麟ピアパーク名古屋    |
| 1月31日（水）  | 三河武士のやかた家康館、八丁味噌の郷、蠟梅の咲く松平郷、キュービー拳母工場       |

PRし、わかりやすさと参加しやすさを訴求するため、行き先に関係なく全コース同一料金（実施者単位）に設定するなど、全コースを通じて同じルールで実施。2つ目に、年間を通して、毎週2回、定期的に名古屋市栄地区を発着する点。産業観光バスツアーの定期催行は全国的にも例がない。3つ目は、実施者はあくまで民間業者であるということ。行政からの金銭的な補助は一切ない。産業観光バスツアー自体はいろいろな地域でさまざま実施されているが、旅行シーズンに限定して実施したり、モニターツアーという形で不定期に開催されたり、行政丸かかえで実施されたりしているケースがほとんど。こういった点から、名古屋の産業観光バスは、観光分野の新しいビジネスモデルへの挑戦としても注目を集めている。

## エリアは「中部9県」。

### 2カ月に1回以上「市内コース」を設定

エリアとしては、「産業観光の魅力を名古屋市民だけでなく、他地域の人々にも知ってもらい、全体として産業観光の機運を盛り上げたい」という考えから、2005年に中部圏9県1市<sup>(※3)</sup>で中部広域観光推進協議会ができたことを受け、滋賀や北陸3県も含めた9県1市に拡大。

一方で、コンベンションビューローでは、市が取り組む産業観光のあり方としては、本来、「名古屋市内の産業観光施設めぐり」を理想的な形としている。しかしこれまでのところ、コースに組み込むことが可能な市内の産業観光施設および資源だけでは集客面で課題があることから、名古屋遊覧バスの時代も最初は市内が中心であったツアーを途中からはほとんど市外をめぐるコースに変更したという経緯がある。そこで、コンベンションビューローが再開に向けて民間企業に声をかける際、条件として提示したのが、この「市内コースの復活」であった。もちろん、民間ベースで事業を行うわけであるから、最初から採算性を無視することはできず、「最低2カ月に1回以上は市内を入れる」ということで決着。2カ月という単位は、コース設定を2カ月単位で行うため。コン

ベンションビューローでは市内の産業観光資源の発掘に努め、市内コースの頻度を除々に増やしていく考え。将来的には、産業観光の本来の面白さをじっくり味わってもらうためにも、移動ロスの少ない名古屋市内コースが主流になるようにしたいという意向である。

(※3) 中部圏9県1市：富山・石川・福井・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀の9県と名古屋市

## ビジネスが成り立つツアーを目指し産官のコラボでコースを企画・PR

実施主体の特徴としては、「観光に強い旅行会社と地域資源発掘を担うコンベンションビューロー」という、それぞれの強みを生かした形での連携で商品を企画しPRしていく点。産業観光バスの実施者は、あくまでも「名鉄観光サービス」と「名阪近鉄旅行」の2社の民間企業。先にも紹介したが、行政からの経済的支援に関しては一切ない。その代わり、コンベンションビューローが企画協力という形でノウハウの提供やアドバイス、PRを担っている。実施者である旅行会社は観光地や観光施設に関しては強みを持っているが、産業観光施設とのつながりはあまりない。そこで、コンベンションビューロー側は、名古屋遊覧バス時代に蓄積してきたデータなどをもとに産業観光のコンテンツを提供。また、他地域のコンベンションビューローや観光協会などともつながりが強いことから、それぞれの地域からコンテンツを紹介してもらうなど、実施者がスムーズにコースの立案を行えるよう支援。また、新たに見学させてもらえる工場の発掘や交渉、産官連携だからこそ取り組みやすい実験的なコンテンツの実現にも力を注いでいる（名古屋観光コンベンションビューロー・小宅観光部長へのインタビュー参照）。PRに関しても、コンベンションビューローのホームページおよび運営する市内3カ所の観光案内所でのPRや、月刊の観光ガイドブック『キラッ都ナゴヤ』（資料3）など各種機関紙に紹介記事を掲載。さらには、日本観光協会と名古屋商工会議所にも協力をあおぎ、それぞれのネット



## 【資料3】

名古屋観光コンベンションビューローが月刊の観光ガイドブックとして、毎月1日に発行。昭和33年8月に創刊した「名古屋市内行事案内」をルーツとするポケットサイズの冊子であり、現在の発行部数は毎月30,000部。内容は、名古屋市内や近郊の毎月の行事予定や観光案内、また宿泊、味、みやげ情報等を掲載。観光案内所で配布。

ワークを活用したPRにも努めていく考えである。

### 3. 産業観光バスツアーの楽しみ方 (参加者の視点から)

#### 募集チラシで心惹かれたコースに参加

では実際、参加者にとって産業観光バスツアーとはどのようなツアーなのか。それを体験するために、10月～11月企画の中の1つに参加することにした。

選んだのは11月8日の「秋の奈良井宿散策とかんてんばば工場」(名阪近鉄旅行主催)のコース(資料4)。紅葉の時期に江戸時代の町並みの面影を残す中山道・木曽路の「奈良井宿」を訪ねられることも魅力だったが、それ以上に心惹かれたのは、少し前に健康的にダイエットができる食品として一躍注目を浴びた「寒天」の製造工場が組み込まれていたこと。申し込んだ日から、まるで子供が遠足の日をわくわくしながら待ちわびるような気持ちになったのは自分でも意外だった。

そして迎えた当日は、さわやかな秋晴れの空が広がる絶好のバス旅行日和。参加者は男性2人、女性10名の計12名で、夫婦連れ、女性の2人連れなどのほか、男性1人での参加もあり、ほとんど



## 【資料4 参加したコースの(11月8日)の行程表】

[長野・木曽飯田]

#### 秋の奈良井宿散策とかんてんばば工場

※紹介文は募集チラシに「みどころ」として記載されていたもの。

〈栄オアシス21バスセンター〉(8時15分出発)

中央自動車道

①奈良井宿散策(約90分)

中山道・木曽路十一宿のひとつ。「奈良井千軒」と言われた日本の宿場町の散策。(昼食)

②かんてんばば工場見学(約40分)

伊那にある皆様おなじみの寒天製品の工場です。自然に囲まれた赤松林のガーデン内で見学と買物。

③農園りんご狩り(約40分)

恵まれた自然のもとで成熟したりんごのもぎ取り(りんご狩り)食べ放題。

④お菓子の飯田城(約30分)

地場産業として菓子、水引が有名です。飯田のお殿様も城下で造られたおいしいお菓子里に思わず舌つづみを打たれたことでしょう。

〈栄オアシス21周辺〉(帰着予定19:30頃)

が50代～60代の方々。「今日はどこを楽しみに来られましたか?」というバスガイドさんの質問には「奈良井宿」と「かんてんばば」がちょうど半々の反応であった。

#### 移動は知的好奇心の旅のプロローグ

バスは、栄のバスセンターを予定時刻の8時15分きっかりに出発。最初の目的地、奈良井宿までは3時間余りのバス移動。年末が迫っていることもあるのだろう、中津川インターで高速道路を降りた後は、工事による車線規制中の箇所が途中で



今回、私たちを「知的好奇心の旅」へと導いてくださったバスガイドの清水さん。

いくつもあり、数分以上停車していることが度々あった。しかし少しも退屈することなく過ごせたのは、バスガイドさんの豊かな知識とウィットに富んだ話術で展開された“楽しいお勉強の時間”のおかげ。色づき始めた紅葉の美しさに目を奪われながら、移動していくポイントごとに切り出される「では、ここで中山道の社会科の勉強をしましょう」といった展開に皆、知らず知らずのうちに引き込まれてしまっていた。そして時折出される問題に参加者の誰かが答えると、それに関連した話題がまたバスガイドさんの口から面白おかしく飛び出し、その度に車内は「へえ～」と笑いに包まれるといった具合。通常のバスツアーでもガイドさんはさまざまな話題を提供してくれるようだから、この車内の様子は産業観光バスに限ったことではないのだろうが、少なくともバスツアーという形態は、“知的好奇心にあふれた観光”である「産業観光」に向いていると感じた。ちょっと物知りな自分になった心地良さとタイムスリップして中山道へ向かう江戸時代の旅人の気分を味わいながら、バスは奈良井宿に到着した。

### リピーターとしての実力をいかんなく発揮してくださったお父さん

奈良井宿をはじめとする今回の行き先の内容については、写真とキャプションでの紹介を参照していただくとして、ここでは、参加された方々の様子と私自身の感想を率直にご紹介したい。参加者のほとんどが1人か2人連れであったこと、ま



奈良井宿での食事風景。奥に向かい合って座っておられる2人がリピーターのご夫婦。

た人数が少なめのツアーであったことから、見知らぬ者同士でも気楽に話せる雰囲気が今回のバスツアーにはあり、奈良井宿でまず昼食を取った際に、この産業観光バスを何で知ったとか、ここが楽しみだねといった会話が始まっていた。

そんな参加者の中には、名古屋観光遊覧バスの時代から何度も産業観光バスツアーに参加されているというリピーターのご夫婦がおられた。次に行く「かんてんばば」にも以前行かれたことがあり、とても良かったということで、今回、このコースに参加を決められたようだ。そんなご夫婦に産業観光バスツアーの魅力を伺うと「私たちのような年齢で今回行くようなところを回ろうと思うと、こういうバスツアーが一番、楽で合っている。料金的にも参加しやすい」と奥様。その横に座っておられた今回が初参加という2人連れの女性も「女性2人で来るのにもこういうのがいいね」と応じておられた。

そしてこの後、私たち参加者はこのリピーターのお父さんに、いろいろと助けていただくことになる。奈良井宿で過ごせた時間は昼食も入れて90分。さすがに日本一の宿場町と言われるだけあって、約1 kmの間にズラリと並ぶ店々の様子や建物の佇まいは、どれもつい足を止めてしまいたくなる風情で、時間はあっという間に過ぎ、少し心を残しながらバスに乗り込んだ。次の「かんてんばば」はもっと短い40分である。前回、ご夫婦が参加された時は寒天について学べる説明会などが組み込まれていたそうだが、今回の企画では時間の

関係で省略されていた。非常に残念ではあったが、見所はそれ以外にもさまざまあり、お父さんがあそこあそこに行くといいよと声をかけて下さったおかげで、見所を外すことなく「行って得した」という気分を味わうことができたのである。

## 次はもっと楽しめる

その後、飯田でりんご狩りとお菓子城の見学・買い物という行程を経て帰途についたバスは、混雑なくスムーズに走れたことで、予定帰着時間の1時間ほど前の18時30分には榮に到着した。

今回の産業観光バスツアーの体験を終え、正直言うと、私自身はもう少し一つひとつを楽しむ時間が欲しかったという思いが強かったので、リピーターのご夫婦にその話をすると、「確かにそう思うところはあるけれど、こんなもんだよ。これが程良いよ」という答えが返ってきた。かんでんばで楽しみにしておられた説明会がなかったことを結構残念がっておられたので、その答えは意外だったが、次の言葉で少し納得できた。「また行けばいい」とおっしゃるのだ。帰り間際の立ち話だったので、その真意をさらに聞くことはできなかったが、今回のツアーの中での夫婦の様子やお話を振り返ると、「内容を少し知っていると、楽しみ方がわかって、次はもっと楽しめるから」ということなのではないかと思う。私の場合、奈良井宿はもちろん、かんでんばでも、そこが見所たっぷりのところであったので尚更、アドバイスを受けるまではどこをどう回ったらいいのか右往左往してしまったが、ご夫婦とはいえば、そこが今回のお2人の見所だったのでだろう、工場内にあるショップのすぐ隣にある試食コーナーで寒天についてのビデオを見ながらゆったりと過ごしておられた。おそらく、このご夫婦は今後、別のコースに参加されることもあるだろうが、奈良井宿やかんでんばへもまたきっと行かれるのだろう。今回再開された産業観光バスツアーの「どの企画や行き先でも料金などを同じ条件で設定し、定期的な催行を継続していく」というコンセプトは、気軽に何度でも参加しやすいという点で、今回ご

一緒したご夫婦のような楽しみ方をされるリピーターの意にかなっている。また、ある主婦の参加者からは、家族が会社や学校へ行っている間にちょっと行って帰って来られるという点が魅力的だという声も聞かれた。女性の2人連れは「グループで行くのも楽しいけれど、人数が多ければ多いほど個々が見たい箇所が違うので、誰かを待ったり待たせたりということも多くなり、楽しめる時間が少なくなる。1人では寂しいけれど、気の合う人と2人ぐらいで気軽に参加すると、こういうツアーは楽しい」と話されていた。

## 【奈良井宿】

中山道・木曽路11宿のうち北から2番目の宿場町（中山道69次全体では34番目の宿場）。難所の「鳥居峠」を控えた場所にあったことから、奈良井川に沿って約1kmの中山道沿いに町並みが形成され、「奈良井千軒」と謳われるほど木曽路一番の賑わいを誇ったという。1968年（昭和43年）に近世の民家として高い評価を受けた中村邸が、川崎市の日本民家園に移設されることが決まったが、奈良井の地にあつてこそ存在価値があるとの考えが村の中で起こり、官・民・学関係者が一体となり、身近な歴史的資産の再確認、継承、維持のための努力が手探りで始まった。これは日本における歴史的居住環境再生への取り組みのさきがけでもあった。1978年（昭和53年）に、国の重要伝統的建造物保存地区に選定。1989年には「手づくりふるさと賞」（建設大臣）を受賞。今も、旅籠の軒灯、千本格子など江戸時代の面影を色濃く残している。

- ① 奈良井宿の町並みの様子
- ② 往時のままの外観で今も宿を営む「越後屋」
- ③ 水道が普及した現代でも、かつて中山道を行き交う旅人ののどを潤し、宿場に生きる人々の暮らしを支えた風情が残る水場。山の湧水からひかれ、夏でも冷たい水であふれている。
- ④ 奈良井宿を散策していると目に付くのが各家の玄関上の木札。これは屋号で、今でも屋号で呼び合うことが多いという。越後屋、伊勢屋、松坂屋、油屋、門屋、枳屋など、当時の出身地や職業などによってつけられたと考えられている。
- ⑤⑥ そば処「山なか」での昼食の内容。飾り気はないが、カレーで漬け込んだ蕪をはじめ興味をそえられる料理の組み合わせで、これで6500円は安いと参加者には大好評。そばは食感も素晴らしく、本当に美味しかった。



①



②



③



④



⑤



⑥

### 【かんてんぱぱ工場】

「かんてんぱぱ」とは伊那市にある寒天のトップメーカー伊那食品工業のブランド名で、本社・北丘工場周辺の3万坪の緑地一体を「かんてんぱぱガーデン」として整備。工場その他、ショップ、ホール、アートギャラリー、レストランなどがある。

- ⑦ かんてんぱぱショップを併設している北丘工場。ショップでは、全てのかんてんぱぱ製品を購入できる。購入者には数点の新商品のプレゼントがあった。
- ⑧⑨ショップの隣にある試食室。この日の試食品は熱湯で溶かすだけのゼリーの素「カップゼリー80℃マスカット」で作った冷たく冷やしたゼリーや寒天ドリンクなど。試食を楽しみながら、ビデオや掲示板に張られた資料などで寒天や寒天を使った食品の情報を得ることができる。



### 【りんご狩り】

飯田市の農園での約40分のりんごもぎ取り食べ放題。

- ⑩ 「わしを選んでやってもいいけどな、自分で選んで取った方が楽しいでな。おしりの部分が黄色いのが蜜が入っている可能性が高いでな」と教えてくれる農園のおじさん。
- ⑪ おしりの部分を上にあげて軽くひねると簡単に取れる。
- ⑫ アドバイスに従ってりんごを選ぶと、蜜がたっぷり。





# 【お菓子の飯田城】

お菓子は水引とともに飯田市が全国に誇る地場産業。(株)飯田城が運営するこの「お菓子の飯田城」では、入るとすぐ「本日の工場製造品」と書かれた場所があり、伝統のお菓子作りを見学。その後、10ほどの各売場を回りながら、試食後、気に入れば購入を決めるという見学コース。

- ⑬ お菓子の飯田城外観。
- ⑭ 本日の工場製造品は名物「赤飯饅頭」。
- ⑮ 1枚1枚手焼きで焼かれているもち焼きせんべい。
- ⑯ チーズの試食コーナーにおしょうゆが…。しかしこれが美味。



⑬



⑭



⑮



⑯

## 4. 産業観光バスツアーの現状と今後の展開

### 《インタビュー》

(財)名古屋観光コンベンションビューロー

観光部長 小宅一夫（おやけかずお）氏



**バス4台が出た近江八幡紀行コース。**

—まだ再スタートを切ったばかりですが、現在までのところ、どのような手ごたえを得ておられるのでしょうか。

小宅 コースによって、参加人数のバラツキはありますが、スタートとしてはうまくいっていると思います。名鉄観光の第1回目の「名古屋の伝統産業施設コース（10月3日）」は1台45名定員のところ、予想を上回る70名近く集まり、バス2台での催行。次の「近江八幡紀行コース（10月10日）」は、実施者側の予想をはるかに超えた189人からの申し込みがあり、バス4台が出ました。名阪近鉄の第1回目「名古屋観光～堀川船下りとイタリア村コース（10月4日）」も、堀川の船の定員が30名だったため、その定員で打ち切ってしまいましたが、かなりの反響がありました。

—参加者の年齢的な特徴など傾向はありますか？

小宅 50代～60代の方が多く、リピーターが多いというのが現在の特徴です。

**“楽しんでためになる産業観光ツアー”として組み合わせを重視**

—コンベンションビューローは、企画協力という

立場で関わっておられるということですが、企画に関して、どのようなところに重点を？

小宅 名古屋の場合は、毎週同じ曜日に継続して民間ベースで行っている新しいビジネスモデルですから、そういう形を続けていくためには、ある程度お客を呼び込める内容にしないとやっていけません。産業観光施設を順繰りに見学するというコース内容では固いツアーとして広く一般には受け入れられにくく、それではビジネスとして成り立たない。ですから組み合わせによってトータルで採算がとれる形にしていくことが重要だと考えています。「産業観光」というコンセプトツアーではあるが、「学ぶ」というよりは「楽しんでためになる」というところに企画のポイントを置き、コース内に必ず1つ以上の産業観光施設を組み入れた上で、そこに行って良かったという内容とコース全体の組合せを重視。例えば酒造見学では、マエストロがいろいろなお酒の飲み方、楽しみ方を教えてくれ、訪れたことで得した気分になるような内容を施設や企業に協力をいただきながら企画していく。そしてその前後に純粹に旅行気分が味わえる内容を組み合わせ、1つのコースとして立案。「行つてためになる」という点と「娯楽的な観光要素」を加味することでビジネスとして成り立つものにしていきたいと考えています。

—ただ、そのビジネスという点で、当初、どの旅行会社も実施者となることには否定的だったということですが、その中で2社が賛同。賛同してくれたポイントはどこにあったとお考えですか？

小宅 旅行会社に取り組んでいる一つは新しいマーケットの開拓です。近い将来、団塊の世代が定年退職後の余暇時代をむかえるわけですが、従来型の物見遊山の安物日帰りツアーに飽きてきているこの世代には「学んで体験して、ためになる旅行商品」が見直され求められるはず。2社は、そのためにはある程度、先行投資を行い、顧客を今のうちに囲っていきたいという意識で取り組んでいただいているのだと思っています。もちろん、

人が集まりやすい商品を組み、同じところに何十台もバスを出すというのが、入場券や食事代の割引などの交渉がしやすく、一番儲かる。これはこれで今後も需要はあるでしょうが、産業観光バスツアーは、「一人でも楽しめる」「じっくり見られる」という点で非常に特徴的な商品。これから高齢化社会に突入するとともに単身世帯もますます増加する傾向がある中で、それに対応した旅行商品というのは実はまだあまりないのですね。そういう面からも、産業観光バスという企画商品は期待が持て、新しい顧客の掘り起こしを狙えると考えています。

### インバウンドツアーへの発展を目指す

—エリアを中部9県にドンと広げられましたが、ビジネスとして成り立たせるということとは別に、何か戦略があるのでは。

小宅 おっしゃるとおり（笑）。我々としては、他地域から名古屋に来ていただくインバウンドツアーが最終目的。この産業観光バスの企画は、そのための大きなプロモーションツールになると考えています。今年、その取っ掛かりとして、浜松のコンベンションビューローさんと連携して、浜松で地元の遠鉄やJTBさんなどの旅行会社を集め、説明会を行いました。名古屋からも観光客を送り込むので、浜松からも名古屋向けのコースを設定していただきたいという働きかけです。今後は東海北陸自動車道の全線開通で北陸地域からのバス旅行による観光客の誘致も狙えますから、この産業観光バスツアーを一つのプロモーションツールとして、互いに産業観光バスを企画することで中部圏内の相互交流を活発にしたいと考えています。

### あえて「実験的」な取り組みにも挑戦

—一方で、市内コース催行の頻度を上げたいというのですが、どのような取り組みを？

小宅 市内でも、企画さえよければ集まるということを、再スタートを切った今回の企画で実感しました。例えば、堀川下りは、これまで東山ガー



産業観光バスツアーで初めて旅行ツアーの「商品」として登場した堀川船下り。10月4日の産業観光バスツアー時の様子。

デンさんがチャーター便という形で行っておられたのですが、旅行会社が旅行ツアーとして組み込んだのは初めてです。こういった実験的な内容は、民間だけではなかなか企画できないので、行政と連携をとることでいろいろと実現させていきたい。これは産業観光だけでなく新たな観光資源の発掘にもつながっていくと考えています。

—企業側から産業観光施設として組み込んで欲しいといったアプローチはありますか。

小宅 現在のところは、そういった応募などの手続きは取っていません。ただコンベンションビューローとしては、我々が関わっている意味として、新たなコンテンツの掘り起こしにも力を注いでいます。その中で、名古屋市内の数少ない酒蔵の1つである「金虎酒造」さん<sup>(※4)</sup>との交渉がまとまり、1月のコースに組み込むことができました。今まで一般の人は入れなかった酒蔵で酒ができる一連のプロセスを見学して試飲もできる酒蔵コースを企画しています。食の産業観光コースは人気があるのですが、名古屋はそこが弱いところ。産業観光で回るためには1施設である程度の時間があるので、うまくコースが組める近場の

(※4) 金虎酒造(名古屋市区)：弘化二年(1845年)創業。代々の越後杜氏の技を活かし、手作りを心がけた酒造りをしている。1945年(昭和20年)5月の空襲で名古屋城と同時に蔵を焼失したことから、現在は名古屋城本丸御殿の再建を願って造る吟醸酒「本丸御殿」の蔵元としても知られている。

食の産業観光施設の掘り起こしがポイントだと思っています。

### 民間が踊りやすいスキームづくりを

—この地域らしい産業観光のコンテンツとして、他に掘り起こしを狙っておられるものはありますか？

小宅 中部圏は航空宇宙産業のメッカ。次世代の航空機ボーイング787の35%を日本が担いますが、その製造はほとんどこの地域でつくる時代に突入しています。これは中部の産業観光としてもとても魅力ある資源であり、ぜひ狙いたい。ただ、非常に企業秘密の多い分野。その点でどこまでできるか。うまくいけば市民だけでなく、国内および国外の観光客が行きたい産業観光ツアーにもなると期待はしているのですが。

—このバスツアーの観点からは少し外れるのかもしませんが、中部圏の産業観光というと、アジア各地からの顧客も狙えるのではないかと思います。

小宅 アジア各地からの観光客誘致に向けた活動については、さまざまな観光資源を組み合わせた形で、現地での説明会などをはじめとしていろいろやっていますが、産業観光ということになると、受け入れ態勢の問題が大きいのです。現状では大量に受け入れることは難しい。受け入れる企業側も工場見学などは社員が案内しなければいけませんし、当然英語など外国語の資料や通訳も必要になりコストがかかる。それが企業にとってどれだけのメリットがあるかという点。そのあたりのスキームがうまくできあがらないと。そういう段階です。もちろん、大切な課題であり、将来的にはそういう方向も考えていきたいとは思っています。ただ、まずは、そういうターゲットではなく、市民の方による産業観光の活性化を目指すことで、域内の交流を図り、域外から名古屋へ来ていただくことを大きな目的にしています。継続性が何より大事であり、長続きするためには採算性の良いモデルをつくっていかないと。

—最後に、こういった新しいビジネスモデルをつくっていく上で、行政の役割はどこにあるとお考えですか。

小宅 何らかの側面的な支援、環境づくりに力を注ぐべきでしょう。行政が自らやる時代ではなくて、民間の人が踊りやすいスキームづくりを行政が担うというのが、一番長続きする方法だと考えています。「産業観光バスツアー」の場合も、正直、旅行シーズンは集まりやすいのですが、次の1、2月は苦戦が強いられると思います。その中でも、「産業観光バス」というコンセプトツアーとして、何とか年間を通して実施していけるよう、さまざまな知恵を絞り、側面的な支援を積極的に行って行きたいと思っています。